毎　日　新　聞

2016年（平成28年）4月4日（月）

# イライラ笑ったことない いっそ車にはねられたら

## 在宅介護者 重い負担

介護家族

**介護者アンケートで寄せられた意見の一部**

| | |
|---|---|
| 30代女性 | 行政は在宅介護現場の実態を理解していない |
| 50代男性 | 介護者支援のため介護保険制度を見直すべきだ |
| 60代女性 | 介護施設で働く人の労働条件が悪すぎる |
| 60代男性 | 介護について社会の理解を深める活動が必要だ |
| 60代女性 | 今は実態に合った介護サービスが使えない |
| 70代女性 | 介護家族が日常的に集える場所があれば良い |
| 80代以上 | 介護者への心のケアが必要だ |

毎日新聞の介護者アンケートの自由記述欄には、心身の重い負担、長期の施設入所待ち、経済的困窮など、在宅介護に伴う深刻な苦悩が並んでいた。国や行政による支援を求める声も多かった。（1面参照）

兵庫県の男性は約5年前から、病気で寝たきりの父親、そして要介護4の母親の2人の介護をしていた。当初は妻に任せていたが、一人では手に負えなくなり、男性は勤めていた飲食店を退職した。このため、収入がゼロになったという。

しかも、介護を始めてから気力がなくなり、男性は病院で軽いうつ病と診断され、薬を服用した。父親はその後亡くなり、母親の介護を続けるが「母親がデイサービス（通所介護）に行く週2日だけが唯一の休み。とにかくいつもイライラしている。介護を始めて心底笑ったことがない」とつづった。

今は貯金が底を突き、切り詰めた生活を送る。「母にはできる限りのことをしてあげたいが、自分たちの将来を考えると不安でならない」と心情を吐露した。

支援団体「つどい場さくらちゃん」では、介護者たちが集まって悩みなどを打ち明ける場を設けている―兵庫県西宮市で3月25日、西本勝撮影

認知症の母親を介護する東京都内の60代の女性は母親を施設に預けたくても、受け入れてくれる所が見つからなかった。どこからも「数年待ち」と言われたという。空いているのは高額の費用が必要な施設ばかりだ。そして、ようやく東京から離れた静岡県で施設が見つかったという。

徘徊（はいかい）を繰り返す母親に対し、「いっそ車にはねられたらいいのに」と思ったこともあった。「今はそう願った自分を責めているが、地獄の日々だった。介護者を支えるために手を打たないと大変なことになる」と、国などの支援を求めた。

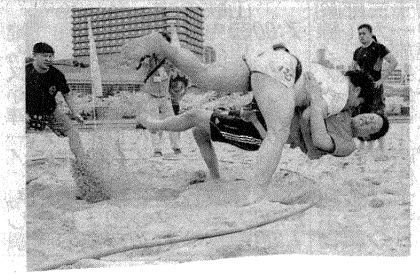
母親を介護していた東京都杉並区の50代女性は「国は在宅介護を進めるが、ヘルパーが来る昼間の時間よりも夜の方が助けが必要だ」と訴えた。幸いに貯金があったため、介護付き有料老人ホームに入所させることができたが、「年金だけでは入所できなかった。年金の範囲で受け皿となる施設がもっと必要だ」とつづった。

兵庫県三田市の60代男性は「介護者に対する支援があまりにもなさすぎる。介護者の心のケアが全くされていない」と現在の介護保険制度の不備を指摘した。働きながら母親の介護を続ける50代女性も「休日は家事に追われてノイローゼになった。細かな支援が欲しい」とした。

60代女性は「介護の仕事に就いても低賃金で辞める人が多い。介

### 調査の方法

8団体を通じて在宅介護者約1000人にアンケート用紙を配り、245人から回答を得た。選択式の質問の他、自由記述欄も設けた。

8団体は次の通り。

栗山町社会福祉協議会（北海道栗山町）▽介護者サポートネットワーク・ケアむすび（宮城県塩釜市）▽杉並介護者応援団（東京都杉並区）▽てとりん（愛知県春日井市）▽つどい場げんごろう（大阪府八尾市）▽つどい場さくらちゃん（兵庫県西宮市）▽男性介護者の会ぼちぼち野郎（同県三田市）▽認知症の人と家族の会福岡県支部（福岡市）